山都町立潤徳小学校　学校だより

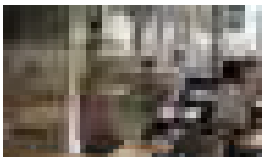
潤徳小伝説～永遠に～

潤徳小HP　令和５年５月１９日（金）　第１０号
QRｺｰﾄﾞ←カラーで見られます！　校　長　池部　聖吾智（みわとも）

朝から校歌が響き渡る学校
一回でも多く歌おう「もっと」

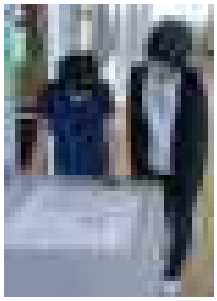
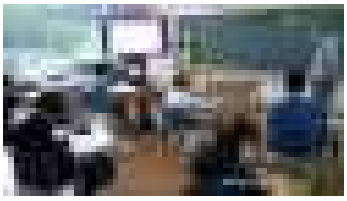
朝の草取りを終えると、外から教室の様子を見回りながら校長室に戻るのが私のルーティンになっています。いつものように、「（！・２年生が）今日も元気に校歌を歌ってるな」と思って観ていたら、３・４年生からも校歌が聞こえ、時間差で６年教室からも聞こえてきたので慌てて撮影したのが左の３枚の写真です。

「今年は児童数が減ったのに校歌の声が昨年より大きくなったなあ」と感じたヒミツはここにあったのです。歌ってるのは低学年だけではありませんでした。ラストイヤーとなる潤徳小は校歌を歌える機会は本当に限られています。思わず、私は新日本プロレスのヒロム選手のように「もっと！」「もっと！」・・・と叫びたくなりました。



外部の視点を入れる＝対話的で深い学び

６年算数の授業では、ここ数時間子どもたちに説明を書かせる場面を意識して多く取られています。「説明する力」は、本校児童の課題です。右写真は、廊下に説明例を置いて必要な子は自分で見に行って参考にしている様子です。また左下の写真は、教科書にある分数×整数の２人の計算式を見比べて説明を考えている様子です。イジワルな私は、立山先生の許可を得て、「『答えを出してから約分する』という表現は日本語としてどうかな？」とツッコミました。すると、「『計算してから』とすればいい」という反応が返ってきました。授業では「〇〇ちゃんの言葉がヒントになった」という発言もありました。これが大切です。決して個人の学びだけでは気づかない「外部の視点」を入れて学びを深める。これが対話的な学びです。

潤徳抄Ⅱ

今回、算数の授業で説明のための文を考えるために教師作成による参考例を廊下に設置して「必要な子は観に来る」という記事を掲載した。ここで「学ぶ」は「まねぶ」ということについて述べたい▼野口悠紀雄著「超」勉強法　プレジデント社に「模倣なくして創造なし」という一説があった。ここで注意しておきたいのは、模倣に止まるのではなく「創造に至る出発点が模倣だ」というのがその意味するところであるということだ▼私自身も、通信等を書くときには、今まで読んだ本で「この表現はうまいなあ」というものは、意識して使うようにした。すると、それ以降は自然に使えるようになるのだ▼一つ例を挙げる。私がM中学校勤務時代の合唱コンクールで、一年時から指揮のうまいHがいた。Hは三年時、初めて他クラスのIに最優秀指揮者賞を奪われた。私はIの、Hの指揮法の研究と努力の成果だとみた。「学ぶ」は「まねぶ」だ。しかし、必ずひと工夫を加えることが必要だ。